真杉静枝文学に語られる「壁」――「烏秋」、「母の傑作」の主人公たち

台湾大学　范　淑文

三歳の時に両親とともに台湾に渡り、17 歳の時に、母親に決められた相手と結婚したが、その結婚に耐えられず日本に脱出した真杉静枝は、日本に戻った後武者小路実篤をはじめ、中村地平など様々な男性と付き合い、波乱万丈な人生を過した。

台湾で長く生活していた人生ゆえであろうか、彼女の作品には「南方の墓」や「烏秋」、「母の傑作」など台湾を舞台とし、台湾と関わっている女性に焦点を据えたものが少なくない。しかし、日本統治という時代性の影響で、真杉の作品はよく戦争の手助けや女性の役割というレッテルが貼られる。勿論、そのような読み方を抜きにすることはできないが、社会的視座をも考察の射程に入れた方が真杉文学をより客観的に捉えられるのではなかろうか。

よって小稿は「烏秋」や「母の傑作」などの作品に描かれている女性らに焦点を合わせ、彼女らの人生の壁、その壁にどう向き合うのかなどを考察しながら、その時代性を明らかにすることを主旨とする。